学校教育における「ソーシャルワーク的支援」の展開過程

—解釈的アプローチによる分析—

○山梨県立大学　　田中　謙（9079）

大津　雅之（山梨県立大学・5538）、高木　寛之（山梨県立大学・6182）

キーワード：教育、スクールソーシャルワーク、地域生活課題、「地縁血縁」

１．研究目的

本研究は教育領域、特に学校教育における「ソーシャルワーク的支援」の展開過程を明らかにするものである(1)。具体的には戦後 1960 年代～1980 年代の中山間地域である A 県 B 村を事例とし、元 B 村小学校勤務経験を有する教員２名の「特別な教育的ニーズ」のとらえ方と支援に関する事例の分析を通して、戦後日本の学校における「ソーシャルワーク的支援」の特質を明らかにすることとする。

２．研究の視点および方法

本研究では、ヴァレリー（2005/2011）を参考にオーラルヒストリー法を用いて、B 村小学校で 1960 年代～1980 年代に勤務経験を有する教員 C 氏、D 氏への聞き取り調査を実施した。調査は 2017 年 1 月 28 日 10:00～12:00 に B 村内公共施設にて行った。

本研究では解釈的アプローチから分析を試みる。解釈的アプローチは「社会的現実を諸個人の相互作用の積み重ねにより構成されたもの」と捉えて、「社会的事象の把握に際して行為者の行為にこめられた主観的意味づけを重視するという行き方をとる方法」（志水 1985：195）であり、人間の内側に存在する主体的意思や主観的な意味づけの分析に有用な分析枠組みである。解釈的アプローチを採用することで、教員本人の主体的意思と意味づけ方に注目することが可能となり、ソーシャルワークという用語がほとんど用いられていなかった 1960～1980 年代においても学校教育における「ソーシャルワーク的支援」に係る教員の認識を懐古的に明らかにすることができるという有用性が見出せるためである。

３．倫理的配慮

本研究では日本社会福祉学会研究倫理指針の規定を順守し、対象者には事前および聞き取り調査時に本研究の趣旨と内容を口頭で説明し、同意を得たことを確認して調査を実施した。調査データに関しては匿名可を行い個人が特定されないように配慮した。

４．研究結果と考察

C 氏は 1960～1980 年代の B 村小学校での教育に関して、以下のように語っている。

C：もちろん、家庭訪問もしますよ、なにもしますけれども、目の前に、こりゃあ困ったっていうような子どもの問題っていうのは、今考えてみてもね、そんなにない

ような気がするんですね。

C 氏の語りから「困ったっていうような子どもの問題」は「そんなにない」と振り返っており、教員が児童の「特別な教育的ニーズ」を学校内で顕在的にとらえていなかったことがうかがわれる。

一方で D 氏は以下のように語っている。

D：子どもたちやそういう困難な家庭とか、そういうものに本当に神経を使わないで、（中略）教育一面に全力をあげることができた、という印象があります。

D 氏の語りからは明確に「特別な教育的ニーズ」をとらえていなかったことがうかがわれるものの、B 村にも「困難な家庭」等が存在したことが読み取れる。では D 氏は B 村という地域でニーズを有する家庭がありながらも、なぜ学校でその対応に取り組んだという意識を有していないのであろうか。その理由を次のように述べている。

D：僻地の特性というか、地縁血縁という、そういうようなことがありまして、地域でもみんなで知恵を出して助けていく、また地縁の中で、手を差し伸べ合いながらやっていくというそういう色彩が強かったので。

D 氏の語りから、「地縁血縁」というインフォーマルな関係性による支え合いが地域で行われており、学校が特に「特別な教育的ニーズ」や地域でのニーズに対応していたととらえていないという意識が強く表れている。D 氏はこのことについて「地縁血縁の中で、助けたり、支えたり、支え合ったり、色々な面で、ダメだぞとか、こうしろよとか、そういう地域の教育力とか、相当あったんじゃないか」と表現しており、「特別な教育的ニーズ」や地域でのニーズを「地域の教育力」で補完してきたととらえているといえる。このような「地縁血縁」の支え合いをまた D 氏は「複式だったのでクラスの中でフォローとフロア、フォローされる方とする方、3 年、4 年と経験をして」きており、「子どもたちの成長に大変役に立って、生きる上で貴重な体験だった」と述べており、「地縁血縁」の支え合いは複式少人数での学校教育の資源であり、その経験が村の「地縁血縁」の再生産につながっているととらえていると考えられる。さらに学校における「地縁血縁」の支え合いは具体的に B 村 E 小学校分校の学区内全戸が PTA に加入していたという「システム」にも表われている。

つまり 1960～1980 年代の B 村には地域がニーズに対応する「地縁血縁」による支援基盤が存在しており、さらに学校を核とした PTA のシステムが「地縁血縁」の補完機能を担い、地域のニーズに対応していたととらえられる。そして小学校ではこの「地縁血縁」が資源として教育実践や学校経営にも活用されていたと考えられる。

５．引用・参考文献

(1)「ソーシャルワーク的支援」の定義に関しては、大津・高木・田中（2017）による。

引用：大津雅之・高木寛之・田中　謙（2017）「ソーシャルワーカーがソーシャルワーク機能を担ってきた者に向けるべき視座」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』12,113-124.